

---

# 聖なるかな～忘れられた神～

熊藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なるかな〜忘れられた神〜

### 【Nコード】

N8514P

### 【作者名】

熊藤

### 【あらすじ】

忘れる事のない記憶。消す事の叶わぬ過去。すべてに決着をつけるために。彼は理を捨てた。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。至らないところもありますが、よろしくお願いします。

## プロローグ

辺りを埋め尽くすのは幾万幾億もの星。それは天に輝く星ではなく、世界の輝き。悠久の時を経て生まれた数多の樹々。

その中を俺は落ちていた。目下に広がる闇に向かって。

自らの体から光が漏れ出していく。だんだんと自分が希薄になっていくのを感じる。意識が遠退いていく。

静かに目を閉じる。自分はここで終わる。右手に握った半身は無惨にも折れ、自身も消え去ろうとしている。何もかも失ったまま……

『このまま消え去るつもりか？』

声に反応し目を開けると、そこには一人の人影があった。目が霞み、その姿をはつきりとは見ることはできない。しかし声色から男の声だと判断できる。そして何より、体の芯まで響くような威厳のある声。

『このまま消えて、貴様は満足か？』

声は問う。

満足？そんなことは微塵も思っていない。

しかし自身の体はもう何かを成す事は叶わない。抗う術も力も碎かれた。自分にできる事は、もう……ない。

『力を欲するか？道を欲するか？未来を欲するか？欲するならば我が手をとれ』

人影はゆつくりと左手を差し出す。目の前に差し出されたはずのそれは果てしなく遠く感じれた。

俺は手をゆつくりと延ばし始めた。

可能性があるのなら、道があるのなら、その道を俺は走り続けると手を握り締めた時、辺りが光に包まれた。

『ようこそ、強敵と同じ目を持つものよ』

## 第二話〜日常〜

ジリリリリ！！

けたたましい音が空間に響き渡る。その騒音によって俺は目を覚ます。

ベッドに横たわる俺は暗闇の中で音源を探す。さまよう様に手を動かすと、不意に何かが手にぶつかる。何かの上にある突起を押すと、音はピタリとなり止んだ青年はゆっくりと身を起こし、左手で髪をかきあげる。

「またあの時の夢か……」

青年の呟きは周囲の暗闇に溶けていった。

前々から、時々ではあるが昔の夢を見る事はあった。しかしここに来てからというもの、頻度は桁違いに増えていた。

「時が近づいているということか……、それとも俺自身が……」

やめよう、今考えても仕方ない。

手を延ばし電灯のスイッチを入れ、時計を見る。

「ゲッ、もう五十分だ」

時計が指すのは2時五十分。慌ててベッドから飛び起きる。クローゼットを開け着替えを取り出し急いで着替える。  
着替え終わると同時に部屋を出る。

空は暗く星明かりだけが世界を照らしていた。アパートの廊下を走

り階段を駆け降りる。一步事にカンカンと金属の反響音が響く。階段を下り、アパートの脇に停めた自転車まで走る。

「遅れて謝罪なんて、御免だ」

自転車に跨がると、目的地に向けて全速力でペダルを漕ぐ。無論立ち漕ぎで。

目的地にたどり着く。腕時計を見ると3時7分。急いで来ただけあって息はかなり乱れていた。

自転車を停め、建物の中に入る。

中では二、三人の人が真夜中にも関わらず、引っ切りなしに何かの束を運んでいた。

「…おっ…はよ……………」

息も絶え絶えに挨拶をする。束を運んでいた壮年の男性がこちらに顔を向けた。

「おはようさん。その様子だと寝坊したな？真」

持っていた束を置きながらこちらを見てケラケラと笑う。

「いや、ちょっと人生について考え事を」

「ふーん、ま、どうでもいいけどな。そこにあるのがお前の分だ。」

俺の左前にある束の小さな山。男性はそこを指差していた。

俺はその山に近づき、それを持ち上げる。束の上には大きな活字で『政治家またも失言』と書かれていた。それは新聞だった。

自分には親がない。必然的に、生活費は自分で稼ぐ事になる。そうして今やっているのが新聞配達というわけだ。もちろんそれだけでは足りないので放課後にもアルバイトをしている。現在自分が担当しているのは150件。

自転車で回るには多いが、ここいらは住宅が密集しているので可能だ。

一件一件回りながらポストに新聞を入れていく。手つきは慣れたもので、スイスイと新聞を入れていく。深夜なので人気もない。ただ車輪が回る音だけが聞こえた。

「ここでラストと……」

最後の家のポストに新聞を入れる。これで今日の分の配達は終わり。すでに朝日が昇り出していた。腕の時計を見れば5時40分。いつもより少し遅いが、支障が出るほどではない。

家に向けて自転車を漕ぎ出す。朝の空気が気持ちよく体を撫でる。朝食は何にしようかと考えていると、いきなり背中に冷たい物が走る。

ブレーキをかける。タイヤとアスファルトの間に摩擦が生じ、そこから少し高い音が鳴る。

左足を地面につけ、首だけで後ろを振り返る。後ろに広がるのは平凡な住宅街。しかしその一画に違和感はいた。塀の間の小道から二つの紅い瞳がこちらを見ている。



小道から出て来たのは犬。しかしその体軀は並の犬よりも大きい。犬歯を剥き出しにして、低い唸声を出す。その紅い瞳は射殺さんばかりにこちらを貫く。

俺はそれから目を離さずに、ただ静かに見続ける。

不意に犬が状態を低くする。体を小さくし、力を込める。そこからバネのように体を使いこちらに飛び掛かって来た。

俺はそれを見て、右手で右のブレーキをかけ前輪を固定し体重をかける。タイミングを見計らって、前輪を軸に自転車を回転させる。飛び掛かる犬の横っ面に後輪が綺麗にヒットし、犬は塀にたたき付けられる。

「去れ」

ただ一言、何事もなかったかのように冷たく言い放つ。

犬は忌ま忌ましそうに喉を鳴らしと、空間に溶けるように消えた。

「時が近づいている……。その先に何が起きるかは運命のみぞ知る……か」

その言葉に答える者は居るはずもなく、呟きは朝の風に消された。

「おはよ」

「オッス真哉」

「おはよう橋川君」

教室に入り

挨拶を返してくるのは森 信介と阿川美里の二人。この二人はいつしよに居ることが多く、信介とは席が近い事もあって仲良くなった。席に着き、鞆を机の横に掛ける。

「なあ、真哉。実は頼みがあるんだが……」

頭をかきながら信介が近くに来る。困ったような雰囲気を出してはいるが、顔はそうでもない。

「ホイ」

内容は聞くまでもない。何時もの通り課題をやっただけだろう。俺は鞆からノートを取り出し信介に渡す。

「へへっ、悪いな」

ノートを受け取るなり席に戻り内容を写し始める。そのスピードはかなりのもので、ノートのページを瞬く間に埋めていく。

「あんたもいい加減課題くらいやったら？」

「いろいろと忙しいんだよ」

呆れ顔で美里は信介の様子を見守る。言葉を返す信介だがペンを動かすスピードは落ちない。

「おい！希美！」

「ふーんだ！」

廊下から何やら口喧嘩のような物が聞こえて来る。教室に二人の男女が入ってくる。女の子の方は明後日の方向を見て、片方の話を聞こうともしない。

仕方なく男の子は自分の席に向かう。

「オッス望」

「おはよう望」

「おはよう信介、真哉」

疲れたような表情で挨拶を返すのは世刻望。クラスの同級生で、いっしょに入って来たのも同じくクラスメートの永峰希美。

「また夫婦喧嘩か？よく飽きないな」

「違っつて、それにあれは先輩が……」

そして俺は少しの時間、望の愚痴を聞いてやるはめになった。

世界は、まだ安定を保っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8514p/>

---

聖なるかな～忘れられた神～

2011年10月8日13時58分発行